

編集後記

この稿を書いている時点で、IOCと組織委員会をはじめとする関係者はオリンピック東京大会の開催を予定通り行うとしています。それに対し世論の意見は分かれています。パンデミックから1年以上が経過したにも関わらず一向に収束の見えない今、東京大会の問題をどのように捉えればいいのでしょうか。キケローは哲学者ピタゴラスの言葉として「トゥスクルム荘対談集第5巻」の中で、古代の競技祭と哲学者の態度について次のように述べています。「祝典は、ギリシア全土から大勢の者が集まり、壮大な競技会が開かれ、祝われるところである。ある者は鍛えた身体で冠の栄光と卓越を求め、またある者は売買の利益に引き寄せられているのだが、他方、ある種の人々がいて、この人々は自由民でも最高の者であり、拍手を求めたり利益を求めたりせず、観察のためにやって来ていて、何がどのようになされているかを熱心に吟味している」(木村健治訳、岩波書店キケロー選集12巻、2002年、p.184)。これは哲学者とはどういうものかとの質問に対してのピタゴラスの回答です。今年の東京大会を巡る状況に当てはめてみれば、哲学者を「研究する者」と読み替えることができると思います。どのような理念が掲げられ、誰が何を発言し、どのように準備と競技が行われ、何が遺産として残されたのか。このように「事物の本性を熱心に観察する者」(同上書、同上ページ)としての態度を我々は研究する立場として忘れてはなりません。

今号では巻頭に本学名誉博士猪谷千春先生のインタビューを掲載しています。長らくIOCの中核にいた猪谷先生の目に映るオリンピックのいまについて、忌憚なく語っていただいております。特集論文は3編掲載となりました。石井論文では人類学をベースにしてIOCという組織の特徴形成を明らかにし、東京大会延期のもつ意味に迫っています。IOCの度重なる強権的な発言のルーツを教えてくれる論考です。佐野論文は新たなメディアが作り出す「空気」の存在に焦点をあて、メガ・イベントとメディアの関係に示唆を与える論考です。野上論文は一連の東京大会開催の動きと全体主義の関連性を指摘し、グローバルな連帯によるオリンピックのあり方を提起しています。原著論文は4編で、オリンピック・パラリンピック教育、スポーツとナショナリズム、オリンピックの社会への影響力、オリンピック不参加問題と政治について論究がなされています。いずれも独自性に富む論文を投稿いただきました。研究プロジェクト報告は3年間の成果報告が掲載されています。論文を執筆された方、審査を担当いただいた方にお礼申し上げます。

バルセロナ五輪の金メダリストの古賀稔彦さんが3月24日に逝去されました。昨年発行された当研究所編集の『日本体育大学 オリンピックメダリストの軌跡』にも寄稿して下さりました。そこには次のような言葉があります。「自分は柔道でいろんなよい経験をさせてもらった。そこで、柔道からいただいた、よい経験をもっと多くの人に経験してほしい、そう考えた」。この言葉の意味を考える時、古賀さんこそ真のオリンピックであったといえるでしょう。古賀さんのご冥福をお祈りいたします。

編集委員長 関根 正美